

ミルに於ける價值並に貨幣の觀念

大 泉 行 雄

一、開題

二、ミルの價值說要旨

三、批判

四、ミルの貨幣概念

五、貨幣の價值

—

西曆前三百年の頃、アレキサンドリアの地に、令名隠れなき幾何學者あり。人呼んでユークリツドと言ふ。其の著「幾何學綱要」の第一編第五命題は「三角形の兩邊相等しき時は、之に對する角も亦相等し」と言ひ、當時、之を釋明すること甚だ困難とせられ、依つて、人々之を名附けるに

ミルに於ける價值並に貨幣の觀念

Pons asinorum (「驢馬の橋」の意)を以てせりと傳ふ。蓋し、其の意は、驢馬の如き魯鈍なる者の渡り得ない橋の義であつて、専ら、初學者の賢愚を試みるに用ひられたものであると言はれる。

降つて十九世紀の中葉、ミルは其の大著「經濟學原理」を公にしたのであるが、その中、地代を論じた處に於て、地代論は、實に「經濟學上の Pons asinorum」とも稱せらるべきもの」と言つたのであつた(註一)。然乍、ミルが世を去つて五十餘年後の今日、之を觀れば、ミルが Pons asinorum の辭を呈すべかりしは、地代論ではなくて、寧ろ價值論ではなかつたらうか。少くとも筆者を以てすれば、經濟學上の價值論こそ、一つの Pons asinorum を形造つてゐるものと信ずる。然るに、今日、經濟理論の中で、極めて重大なる部分を成し、従つて又、論議の最も錯綜して居る價值の問題に就ては、やがて明にする如く、ミルが、其の先行者の成就した所に、更に寄與した所は、大であると言ふことが能きない。否、反つて寧ろ少しと言ふも過言ではないのである。此の事は、ミル自身の言葉に依つて證明せらるゝ所であつて、「經濟學原理」の價值論初頭に於て、「幸にも、價值の法則に關しては、現在(一八四八年)及び將來の學者が、更に開拓すべき餘地更に存在せず。價值の理論は、既に完成せられて居る。僅かに残されたる障礙は、理論の實際的適用に於て生ずべき困難を豫想して、之を解決し得る様に表示することのみである」(註二)と明言してゐることよりするも察知

することが能きやう。従つて、ミルの價值説の中より、特に新らしき何物かを讀者の前に捕へ出すことは不可能なことであり、又筆者は其の事をさして必要の事とも思はない。筆者が、此の一文に於て企圖する所は、正統派經濟學の潮流にて、集大成者の立場に在るミルが、價值論に於て、如何に其の先行者の説く所を集成してゐるかを明かにせんとすることが其の一。次いで屢々過渡的思想家と稱せらるゝミルの價值説は、ミル以後に成育を遂げた價值理論に對して如何なる關係を採るかを示さんとするが其の二。最後に價值の問題と密接なる關連に立つ貨幣の觀念に就き、ミルの説く所の一斑を傳へんとすることが其の三。我々は先づミルの價值觀念より伺ふであらう。

(註一) J. S. Mill: Principles of Political Economy (edited by Ashley), BK. II, ch. XVI, p. 432.

(註二) Ibid., p. 436.

二

アダム・スミスは周知の如く、財の價值を分つて、使用價值 (Value in use) と交換價值 (Value in exchange) との二とし、前者は、特定の財が有する效用 (Utility) に基き、後者は、それに依つて他の財を購買する力 (Power of purchasing) に基くものであるとなした。而も、スミスは更に論じて

言ふ、使用價值甚だ大なるも、交換價值の僅少又は皆無のものがあり、之に反して、交換價值は最大なるに、使用價值の殆ど無いものもあると。前者の例としてスミスは水を挙げ、後者の例としては、ダイヤモンドを舉げて居る(註一)。然るにミルは、スミスの此の考察の總べてに對しては、必ずしも賛同しない。前者、即ち使用價值大なるにも不拘、交換價值の殆ど無い場合あるは、ミルも認めるけれども、此の逆に就てはスミスと見解を異にするのである。何となれば、ミルに於て、效用、或は有用性(Usefulness)とは、人間に對して快感(Pleasure)を與ふるものである。斯く觀れば、人がダイヤモンドを所有することは、之によつて何等かの快感又は満足を得て居るものと言はなければならぬ。換言すれば、使用價值を認めて居ると言はなければならぬのである。されば、交換價值甚だ大なるにも不拘、使用價值の殆ど無きものありと言ふスミスの考は、ミルにとつては矛盾と言はねばならない。若し、スミスの言ふ所が正しとすれば、「人は自己の欲望を満足せしめんとて或財を求めんとする時、それに對して認める價值以上をば、提供する」と言ふ背理を導くに至る(註二)。

扱て、經濟學で、單に價值と言ふ場合には、常に交換價值を指すものである。然らば、價值と價格とは如何なる關係に立つか。曰く「價值及び價格なる用語は、初期の經濟學者間には區別せず

用ひられ、リカードに於てさへ、常に明確なる識別が行はれたりとは言はれない。然し、現代の嚴正なる論者は、一個の觀念に、二個の貴重なる科學的用語を濫用するをば避けるため、價格を以て、貨幣に關係せしめたる價值と解するのである。換言すれば、交換に於て提供せらるゝ貨幣量である。それ故、物の價格とは、貨幣にて示されたる價值と觀らるゝ。而して、單に物の價值又は交換價值とは、其のものゝ有する一般的購買力を言ふ。換言すれば、其の物の所有によつて、購買し得る財一般に對して有する支配力を言ふのである」(註三、四、五)。

財が交換價值を有するためには、二個の要件を必要とする。其の一は、其の財が效用を有することであり、其の二は、獲得の困難の存在することである。後者に關しては、更に之を三つの場合に分つて觀察することを必要とする。

第一は、分量に絶對的制限の存する時、

第二は、資本・労働を増加することによつて、生産費を高めることなく再生産し得る場合、

第三は、労働と資本とを増加するにつれて生産が遞減的なる場合、

即ち是である。

扱て第一の場合に、價值を變動せしめる原因は、需要と供給との關係である。茲に需要とは、*A*

ダム・スミスが言つた様に、購買力を伴つてゐる要求、即ち有効なる需要 (Effectual demand) を指す。かくて、需要・供給の何れか一方又は双方に變化が生ずれば、價值は従つて變動し、需要・供給が相適合する一點に於て定るのである。價值變動と需給との關係は相互的である。需給の不均衡によつて、價值變動を生ずれば、此の變動に依つて定りたる價值は又需給を相適合せしむるからである。されば、供給に絶對的制限ある財の價值法則は、ミルの語を以てすれば次の如くなるであらう——

「今需要と供給との間に不均衡が生ずれば、競争が之を均衡ならしめる。其の状態は價值の調整となる。需要増加すれば價值上り、需要減少すれば價值下る。之に反して、供給減少すれば價值上り、供給増加すれば價值下る。斯くの如くして調整せられたる價值が、不均衡なる需要と供給とを、再び平衡點に落附かせるのである」(註六)。

去り乍ら、右に示す需要・供給の作用が無制限に作用するものであると考ふるは早計に失する。如何なる場合に於ても、一定の最低限が存在する。「價值が生産費を回收し、同時に通常、期待せらるゝ利潤を生ずるに非れば、生産は繼續せられない。資本家（企業家の意……筆者註）は、損失を敢てし乍ら絶えず生産を續けては行かぬであらう。否、假令、利潤ありとするも、それが生計を支ふるに足らぬ場合には、等しく生産は續行せられないのである」(註七)。ミルは此の限界たる價值を

ば、必要的價值 (Necessary value) と名附ける。

第二の場合は、生産費を高めることなく、無限に増加せらるゝ財に關するものであるが、斯る財の必要的價值は、競争にして完全に作用する限り、同時に最高價值 (Maximum value) をなすものである。何となれば、通常以上の利潤を生じつゝある事業に向つては、他より資本・勞働が流入し、供給増加を結果するため、利潤を少くし、斯くの如くして常に平均せらるゝ傾向があるからである。アダム・スミス及びリカードの所謂、自然價值 (又は自然價格) が即ち之である。かくて、無限に増加し得る財に就ては永久的には需要供給の原則は、最早作用し得ない。需要供給は、單に、供給を變化し得ない一時的の間に限つて價值を決定するに過ぎないのである。而して、生産費を高めることなく無限に増加し得る財の價值は、生産によつて定められる。此の生産費によつて決定せらるる價值が、需要供給を變動せしめて行くのである。

第三の場合は、收穫遞減の法則に支配せらるゝ財の價值であつて、例へば農産物の如き其の一例である。此の種の財に在つては、最も不利なる條件の下に生産せられたる財の生産費が、他の總べての優位にあるものゝ價值を決定するのである。

如上の説述に依つて知る所は要するに次の點に在る。財の價值は、一時的には需要供給關係によ

つて決定せられ、永久的には、生産費によつて決定せらるゝ。然らば、謂ふ所の生産費とは如何なる組成を有するものか。之が吾々の次いで聞かんと欲する所である。

生産費の第一を成すものは、先づ労働である。労働には直接的のものと、原料等に投ぜられたる間接的のものとを含めねばならない(註八)。

第二は賃銀である。賃銀が生産費を成す場合は、賃銀の一般的なる高低ではなくて、相對的なる場合に限る。詳言すれば、一般的に影響する賃銀の高低は、總べての財に同一影響を與ふるが故、相互の交換價值には、何等の變化を來さないからである。

第三には利潤である。單に利潤と稱するも、其の中には、自ら二種の性質相異なるものあるを認めねばならない。一は資本主の節欲に對する報酬であり、二は原料の生産者が、それに轉嫁せしめたる彼の利潤を、買手が支拂ふもの是である。而して利潤が生産費の一部を組成してゐることは、同一労働量の成果が、必ずしも總べて同一價值を有しないことによつて容易に看取することを得る。

例へば葡萄酒は、時間の経過と共に、その價值を増加するが如きは、利潤によるものと言はなければならぬ。利潤も亦賃銀と同じく、一般的増減は之を考慮に入れる必要が無い。唯特殊にして、相對的なる場合、例へば、利潤の發生が時間的経過に關係をもち、而して、その時間的経過の間に、

財によつて差異あるが如き場合に價値に影響を與ふるのである。

第四には、差別的租税が價値に影響を與へ、従つて生産費の一要素たることも、右に叙べたると同じ意味に於て明かであらう。更に又、原料が稀少價値を有するものである時も、その餘分なる價値は生産費を形造る一要素となる。

然らば最後に地代は生産費を成すや否や。地代の發生は生産に於て、收穫遞減律が作用する場合に在ることは茲に改めて説くを要しないであらう。即ち之が問題となるは、曩に叙べた三種の生産の中、第三の場合である。而して、斯る財の價値は、生産條件の最も劣れるものによつて決定せらるゝことも既に述べた。最も劣れるものとは、別言すれば、地代を發生しないものに外ならぬ。故に地代は、生産費を形成しないことが明かとなるのである。曰く

「されば地代は、農産物の價値を決定する生産費には、全く含まれない……………」。

地代は、全く、價値の原因ではなくして、特權の値である。その特權とは、最も條件の劣れる土地の生産物以外のものが（土地の豊度に應じて）、種々異なる程度の報酬を受け得る特權である……………」。

されば地代は、法律によつて、特に増加せられぬ限り、消費者に對し負擔とならず。従つて穀

物の値を増加せしむるものでは無い」(註九、十)。

(註一) A. Smith, *Wealth of Nations* (edited by Cannan), vol. I, BK. I, ch. IV, p. 30.

(註二) J. S. Mill, *Principles*, p. 437.

(註三) *Ibid.*, p. 437.

(註四) 斯くの如く説くことによつて、ミルは、一般的價格の騰落なることはあれども、一般的價值の増減なることは矛盾であることを明にしてゐる。前者は、貨幣の價值の騰落に外ならないのである。

「Aは、B及びCの一層大なる分量と交換される時にのみ、其の價值を増加する。其の場合、B及びCは、從來よりも少いAと交換せらる。總べての財が相互的に價值を大にすることは不可能である。市場に於ける財の半數が交換價值を大にすれば、此の事實は、他の半數の財の交換價值の下落を意味する。斯くの如く、價值の騰貴は、必ず他方に下落を豫定して居る。相互に交換される財が總べて價值を大にし、又は下落することの能きないことは、十二人の走手が何れも一着になり、又百本の樹木が何れも他を凌駕して成長することの不可能なことと相同じい」(Mill: *Principles*, p. 439)。

(註五) ミルが考察する價值及び價格の現象は、競争が、而して競争だけが唯一の作用者である假定的場合に於けるものである。換言すれば、一物一價の法則が、理想的に實現せられてる場合に於けるものである。然乍、現實は、慣習・偶發的事項・感情其の他の事情によつて、この假定的状態より遠ざかつてる。

「總べての當事者が、彼自身の利益を追及すると假定して」(Supposing all parties to take care of their own interest)と云ふ前提の常に存在することに注意しなければならない (Mill: *Principles*, p. 441)。

(註六) *Ibid.*, p. 448.

(註七) Ibid, P. 451.

(註八) 價値決定の要素として、費されたる労働を重要視する點は、ミルに於ても労働價値説の面影を認めることが出来る。而して、之は、リカードの影響に立つものなることを示す (Ricardo, Principles, p. 18)。然るにミルは、労働のみに限らず、尙幾多の要素を掲げることによつて、所謂生産費説なるものに屬すと言はれるのである。然し、之に對する筆者の考察は次節に示すが如きものである。

(註九) J. S. Mill, Principles, pp. 472—3.

(註十) ミルは、如上の價値決定原則に對して、二個の例外を認める。

- (イ) 生産物の一部を以て、生産者及び其の家族が生活し猶餘剩ある場合。斯る農業労働者に在つては、この殘餘生産物を生産費よりも尙以下に賣却すること屢々である。勿論、この場合と雖も、最低限はあつて、彼が必需品の購入、及び地代の支拂に足るだけ以上を得るに非れば手放さぬの言ふまでもない。但、此の地代は、慣習又は土地借用に對する競争によつて定るもので、通常の地代理論によるものではない。故に、かゝる地代は生産費の一要素と成る。而して、農業者の餘分生産物は、需要供給の理によつて價値決定せらるゝ。筆者を以てすれば、此の場合の地代の意義は、本文に言ふが如き地代ではなくて、單に借地料に外ならないと解するが妥當と思ふ。
- (ロ) 奴隸労働の存する場合。奴隸を使用する爲めに要する費用が、自由労働者を雇備する費用より少き時は、奴隸を有す生産者に利益がある。然し、若し安き労働が總べての生産業に共通となれば、この利益は消滅する。

三

前節に示したるが如く、ミルが價值を論ずるに當つては、「幸にも價值の法則に關しては、將來開拓すべき何物も残されて居ない」と、極めて樂觀的態度を採つたのであつた。然るに、ミルが此の如く揚言してより、僅かに約二十年を経て價值論は、一大新生面を開くに至つた。今日勞働價值説と相對立して、重要視せらるゝ主觀的價值説即ち限界效用説が、ジエヴォンス、メンガー、ワルラ等によつて唱へらるゝに至つたこと即ち是である。正統派經濟學の價值説に共通なる態度は實に其の客觀的立場に在る。而して、ミルに在つても亦之は當然なる所であつた。限界效用の觀念か、ミルに於て尙ほ現はれて居ない消息は、有名なるミルの國際價值説を觀れば一層明かになる。即ち、ミルは、外國貿易發生の原因を、彼の比較生産費説に求める。而して、此の場合、看過し得ない一つの重大なる假定は、貿易する二國に於て、一定の勞働と資本とを投ずれば、如何なる財と雖も、生産し得らるゝと言ふこととでなければならぬ。假設例を以て示さう。

今、一定の勞働と資本とを投ずる時、甲國に於ては、絹二單位又は小麥八單位を生産し、乙國に於ては、絹三單位又は小麥十八單位を生産す。然る時は、二財の交換割合、甲國では絹一に對して小麥四、乙國では絹一に對して小麥六となるであらう。甲乙兩國が貿易を開始すれば、比較生産費の理によつて、甲は絹、乙は小麥を生産し、相互に交易する。而して、交換割合は、絹一に對し、

小麥四乃至六の間の一點に定らねばならないのである。其の理は極めて明瞭であつて、甲國若し其の提供する絹一に對し、乙國の小麥六以上を要求するとすれば、乙國は、國內に於てさへ、小麥六に對して、絹一を求められるのであるから交易を欲しないであらう。反對に、乙國がその求めんとする絹一に對して、小麥四以下を提供せんとすれば、甲國は交易を欲しないであらう。従つて絹一に對して、小麥四乃至六は、何れも其の交換比率が決定せらるべき最高・最低の限界をなすものと言ふことが能きる。然るに、此の理論が成立し得るためには、甲乙何れも絹・小麥の二財を生産し得ることが缺くべからざる前提である。然るに、事實、貿易の行はるゝ多くは、其の國に於て生産し得られない財を目的とすること多く、斯くては、以上の如き交換價值決定の限界が存在しないこととなり、比較生産費説は成立し得ないこととなるではないかとの疑問が生ずる。クルノーが斯説に加へたる論難は正に此の點に存する。然るに、ミルを擁護せんとするバスターブルは答へて言ふ、比較生産費説が其の効果を有するのは、各種の財が、各國に於て生産し得る場合に於てある。若し、何れかの國に於て、生産不可能なる財が交易目的物となる場合には、價格の決定は、限界效用の根本理に依つてなされねばならないと。ミルを擁護せんとするバスターブルの企ては、反つて寧ろミルの説、従つて又正統學派の價值説の缺陷を明示することになつた事は、夙に上田博士

が之を指摘する所である(註一)。之を要するにミルの價值說の中には、彼以後に於て一大發展を遂げ
るに至つた主觀的價值說の思想は存在しなかつた事が明になるのである。

ミルは價值決定の要素を生産費に求めた所より、彼の學說は屢々、價值論上、生産費說なるもの
の範疇に含められる。而して論者、往々にして價值の根源を論ずるに當り、需要供給說、或は生産
費說・勞働說、若しくは效用說等を並列に置いて論評を加へる。斯る論者が、生産費說に對して加
へる批評の要旨は次の一點に在る。生産費說なるものは、財の價值が、生産に要したる費用によつ
て決定せらるゝと云ふものであるけれども、斯くの如きは何等價值の原因を明になし得る學說では
ない。何となれば、生産費なる費用そのものが、既に一つの價值をなすものであるから、徒らに循
環論となり終つて、問題は決して解決せられたものではないと。

若し、生産費を以て、價值の根源を説明せんとするものならば、筆者は、右の如き論者の批評が
當然なるものであると思ふ。而して、斯くの如き立場より生産費說を觀察する限りに於ては、價值
の説明に當つて、殆ど一顧の價だに無きものとなり終るであらう。然乍、筆者は茲に、生産費說な
るものに對して、一つの異なる解釋を試みたい。之に依つて、生産費說をば、極めて同情深く解釋
して見たく思ふ。其の解釋は、時には餘りに同情に過ぎ、時には餘りに囚はれたる立場を擁護する

ものであるかも知れぬけれども、一つの解釋として茲に公にするを許されたい。

惟ふに、經濟學上の價值に關する問題に就ては、二個の異なる觀點より、之を究明することが出来ると思ふ。其の一は、價值そのものゝ根源を窮めんとするもの、換言すれば、價值の原因に關係するものであり、其の二は、價值の變動を觀察せんとするもの即ち之である。従つて、斯くの如く價值に對する觀察の立場を分つ時は、莫然、需要供給説・生産費説・勞働説及び效用説等を並列せしめて論評することは、妥當なる方法でない。筆者を以てすれば、本來、需要供給説、及び生産費説は、價值發生の原因を示さんとするものではなくて、單に價值の増減・變動を示さんとするものである。故に、之等が價值そのものゝ根源に就て釋明する所無しとするも、直にそれを以て非難するは不當ではなからうか。若し、生産費説が非難せらるゝ場合ありとすれば、それは、價值の根源に關係するものではなくて、價值の變動に關係するものでなければならぬ。之を例ふれば、生産費説の價值論上に於ける位置は、尙溫度を指示する寒暖計の如きものであらう。寒暖計は種々に變化する溫度の高さを決定す。然れども、之によつて外氣の溫度の原因が示されるものではない。氣溫の原因は寒暖計によつて明かになるものではなくて、全く異なる研究を必要とする。故に、寒暖計は、氣溫の原因を教へないことを以て非難さるべき理由を有たぬ。若し非難さるべき點ありとす

れば、其の示す所が氣温の變動と相一致するや否やの點でなければならぬのである。筆者の言はんと欲する所は次の點に在る。生産費説は價值を説明する上に於て全く妥當なる學説ではないかも知れない。それは筆者も認める。唯、その批判は、之を以て價值の原因を解明し得ないてふ點に加へられてはならぬことである。批判は生産費が、交換價值の高さを決定する唯一の要素なりや否やの點になされねばならぬと言ふのである。

そこで進んで考へる。財の價值の高さを決定する要素として生産費を掲げるとは、之を他面より觀れば、價值變動の原因をば、財の供給側よりのみ説かんとするものである。資本と勞働とを増加するも生産費を高めることなく生産増加し得る財の價值は、ノーマルヴァリュエー正常價值又はナチュラルヴァリュエー自然價值に定り、收穫遞減律に支配せらるゝ財の價值は限界生産費によつて定めらるゝと言ふ場合にも、之等は總べて、財の供給側に於ける價值決定の要素である。然乍ら、財の價值は、單に供給者側のみの一方的事情によつて定まるものではなくて、之を要求する需要者側の事情をも考察しなければならぬのである。此の需要者側に立つて、價值の問題を取扱はんとするものが即ち限界效用説である。

限界效用説は、主觀的・心理的立場を採る。財の需要者は、その求むる財の増加すると共に、それによつて得る效用は削減せらるる。従つて、その財に認める價值が漸減する。此の如くして行け

ば、遂には、需要者が、辛じて需要の希望を惹き起す點まで低減して行くであらう。此の點を越えては最早何等の效用をも發生しないものであるから、之即ち限界點であつて、此の限界點に於ける效用が限界效用又は最終效用と言はるゝものである。而して、需要者に於て價值を決定するものは、實に限界效用によるものであるとなすのが主觀的價值説の骨子である。

此の二者は如何なる關連を有するか。之を明かならしめる爲めに、茲にプライスの言ふ所を援用しやう。即ち其の説く所によれば、賣手の側に於ては、生産費が價值を決定し、買手の側よりすれば、限界效用が價值を決定する。曰く

「ノーマル・プライス正常價格に影響を與へる勢力は、或は賣手の側より、或は買手の側より考察せらるゝてあらう。而して完全なる理論を築かんとすれば、其の各々の側に於て、別々に求め得たる結果を綜合せしめねばならない。云々」(註二)。

スミスに依つて先づ指摘せられたる價值の二種——交換價值と使用價值——の中、ミルが採つて以て考察の對象としたのは前者だけであつた。然るに、限界效用値に依るものは、その主觀的立場より、主として後者を採つて研究對象としたのであつた。而してプライスの如きは、綜合的態度を採つて、二者何れにも眞理の存するものあれば、一方のみに偏することを許さず、双方を按配すべ

きことを唱ふるのである。

曩にも言へる如く、價值論の問題は、價值發生の根源の問題と、價值變動(又は價值の高さ決定)の問題との二つとなる。價值そのもの、本質、即ち之が如何にして發生するかに就ては、之を勞動に求める方法もあらう。之を欲望満足てふ財の効用性に求める方法もあらう。それ等の當否は今茲に問題としない。唯、少くとも、交換價值としての高さを決定せらるゝ場合には、需要側又は供給者何れか一方の事情——例へば生産費と言ふが如き——のみによるものではなくて、双方の事情によるものなのである。ミルも、一時的なる價值の變動は需要供給の關係に依ると論じて、需要の點にも觸れたのであるけれども、然し、需要者側の問題は、是以上發展せしめられず、遂に生産費說の中に其の位置を占むるの外途なきに至つたものである。

經濟價值の問題は、經濟理論中の難關であつて、現在と雖も解決せられたものとは言ふことが能きない。ミルは彼の先人の説きし所に満足して、既に曲盡されたりと言つたが、反つて、價值論上の錯綜は、ミル以後に至つて、局面を轉換し、論議の舞臺を現出せしめたと言はねばならないのである。再びプライスの語を以てすれば、ミルは價值說に於ても、彼の經濟思想全體の傾向と同じく、過度的であつたのである(註三)。

(註一) 上田貞次郎博士、國際價值學說(經濟大辭書)。

(註二) Price, A short history of Pol. Econ. in England, pp. 101—2.

(註三) Ibid., p. 112.

四

貨幣の問題に移るに當つて、吾々は先づミルの貨幣概念を説明して置かねばならない。貨幣の本質に就ては、ミルの思想中、莫然乍ら、今日の所謂、指圖證說と相通ふ所無いわけではないけれども(註一)、然し、全體の思想の根底となり、一貫的脈理をなして居るものは、今日の貨幣論上の用語に於ける金屬說の思想である。

貨幣は如何なる事情より發生するに至つたかの、貨幣起元論に關しては、ミルも、多數學者によつて採用せられてゐる物々交換の不便に基くてふ思想に依つてゐる(註三)。貨幣の本質は、流通媒介物(Circulating medium)たる點に在りとミルは考へる。従つて、斯る流通媒介物の存在しない物々交換の場合には、異りたる種類の價值を秤量する爲めの共通尺度がないであらう。斯くては、交換が圓滑に行はれ得ないが故に、茲に流通を媒介すべき第三者が必要となるのである。斯くの如き必要か

ら求めらるゝ媒介物は、次の三性質を有たなければならない。

- (イ) 分割性 (Divisibility)
- (ロ) 一般に需要あること (General desire)
- (ハ) 耐久性 (Durability)

之等三個の特質を具有する代表的なものは、即ち貴金屬たる金銀である。此の故に人間は、金銀を貨幣として採用するに至つたのであつた。金銀が貨幣として適性を有つことの更に重大なる理由二つある。其の一は、金銀の價値の安定なること、換言すれば、他の一般財と比較して、金銀は比較的に其の價値變動すること少いことであり、其の二は、品質の均一性之である。例へば寶石の如きは、耐久性あり且つ一般に強く要求せらるゝものであるけれども、品質に著るしい差異あると共に、分割性に甚だ乏しい爲め、貨幣たるの資格を有ち得ないとミルは論ずる。

(註一) J. S. Mill, Principles, p. 487.

高垣寅次郎氏、貨幣指圖證說の主張とその批判(商學研究、第四卷第三號)。

(註二) 貨幣發生の起元を物々交換の不便に求めることは、殆ど通説として行はれる所であるが、之には反對説無しとしない。

高垣寅次郎氏、貨幣の成生と其の形態の變遷(商學研究、第二卷第一號)。

同 上、アダム・スミスの觀たる貨幣理論(商學研究、第三卷第一號)。

を参照せられたし。

五

貨幣の概念を右の如くに解くミルが、貨幣の價值に對しては如何なる態度を持するか。先づ彼は、貨幣の價值 (Value of money) なる觀念に就て、分析を與へ、異なる二個の觀念を示す。その一は本來の意味であつて、貨幣の購買力を稱す。従つて、反面より之を言へば、物價であつて、二者は表裏の關係に立ち、互に反比例するものである。其の二は、商取引上に於ける用語であつて、此の場合には、借入資本に對して支拂はるゝ報酬(即ち利子)をば稱す。而して、茲に問題とするのは、前者たる貨幣の購買力に外ならない(註一)。

貨幣の購買力即ち茲に所謂貨幣の價值に就て、ミルが採る立場は、一言にして竭くせば、曩にも言へるが如く金屬主義である。詳言すれば、「貨幣は一種の財であつて、其の價值は、他財に於けると等しく、一時的には需要供給の關係により、永久的には(平均的には)生産費によつて決定せらるゝ」のである(註二)。

貨幣の價值は、一時的には需要供給の關係によつて決定せらるゝ。貨幣の供給とは、人々が提供

せんとする貨幣の分量である。詳しく言へば、人々が保藏又は留保せる部分を除いた残りの全部の貨幣量であつて、或る一定の時に流通する貨幣の總量を指す。貨幣の需要とは、賣却に供せられる財の總量より成立する。何故なれば、財の提供者は、他面よりすれば貨幣の買手となるからである。

右の如くに考ふれば、財の需要供給と、貨幣の需要供給との關係が明白にせらるゝ。即ち――

財に對する需要は、貨幣の供給であり、

財の供給は、貨幣に對する需要となる(註三)。

此の如き關係より、必然的に導き出される結論は、貨幣數量説に外ならぬ。即ち、他の事情にして同一ならば、貨幣の價值はその數量に反比例の關係に立つ。數量増加すれば、價值は低落し、數量減ずれば、價值は増加する(註四)。

然乍、單なる貨幣の數量は、其の流通上の數量と同一ではない。何者、同一の貨幣が、幾回も用ひられるからである。而して、此の事は財に就ても言はれねばならない所であつて、同一財が數回賣買の目的物となるのである。従つて、今若し、財の數量と、之が轉賣せらるゝ回数とを一定なりとすれば、貨幣の價值は、貨幣の數量と流通の回数とに依存すと言ひ得るのである。換言すれば、「財の數量とその取引回数とが一定なりとすれば、貨幣の價值は、其の數量に、流通の速度を乗じた

ものに比例する」。而して、「流通に於ける貨幣の數量は、賣却せられたる總べての財の貨幣的評價をば、流通速度にて除したるものに等しい」(註五)。

貨幣の價值の一時的變動は、右に叙ぶるが如く、需要供給の關係によるものであるが、永久的には、生産費によつて支配せらるゝ。茲に、ミルの金屬說的立場が最も明瞭に認められるのである。即ち今、何等の人為的制限が貨幣の數量を左右せず、自由鑄造が行はるゝと假定すれば、貨幣の價值は、それが形造られてゐる材料たる地金銀の價值と一致する。而して、地金銀の價值は一般財と等しく生産費によつて決定せらるゝが故に、貨幣の價值も亦永久的には生産費によつて決定せらるることとなる(註六、七)。

貨幣の價值に關するミルの説は、凡そ上述するが如きものである。之によつて明かなることとは、其の價值觀念が一般財に於けるものと何等の差別なきことである。筆者は本稿の前段に、ミルの價值論一般を紹述したが、その説き方は、貨幣に於ても其のまゝ適用せられて居るのである。之ミルは、結局に於て、貨幣も亦一種の財に外ならないと言ふ根本思想を擁するがためである。

貨幣を財なりと實體的に觀察し、財の價值は生産費によつて決定せらるゝが故に、従つて貨幣の價值も亦、之を形造る素材の價值によつて定められると言ふ金屬學說を採る限り、貨幣の價值に關

しても、之を購買力と解釋する以上の考察は行はれないのが常である。然るに現在、貨幣本質理論上の問題は、金屬學說と名目學說との對立であつて、而も一般傾向としては、後者が前者を壓倒しつゝありと觀ることが能きやう。而して名目說の立場に立つ時は、貨幣の價值なる觀念に關して、更に一步進めた考察を試むることが必要となる。何となれば、名目說を採る人々の間には、貨幣の價值を否定せんとする者があるからである。素材價值を以て、直に貨幣の價值となし、而して、三轉して之を貨幣の購買力となす金屬學說に於ては、貨幣自體の價值なる觀念と其の購買力なる觀念は同一とせらるゝからで、之等二個の觀念の間には間隙が有り得ない。然るに名目說に在つては、筆者を以てすれば、之が必ずしも一致する觀念では無いことを認めざるを得ないものである。否、進んで論ずれば、此の間隙あればこそ、名目說が金屬學說に對立する意義一層闡明せらるゝと思はれる。蓋し、貨幣の購買力とは、貨幣と財貨との交換關係に於ける現象であるから、如何なる學說を採るとするも常に存在するものである。然るに貨幣の價值に至れば、名目說を採る人は、素材價值なる觀念を最も勇敢に拋棄するものであるが故に、他に之を求めねばならない。或は、然らざれば、何等か異なる解釋を與へねばならない。茲に於てか、貨幣の價值は、その竭くす所の機能に存すると論ずる機能價值論が發生する。之は、貨幣の價值をば素材價值以外の何物にか求めんとする立場の

現はれてある。然るに他の學者は、貨幣そのもの、價值は絶對に之を否定する。謂へらく、貨幣の貨幣たる本質は、それが抽象的價值單位として、而も、總べての價值の公分母たる所になければならない。即ち一般的價值の單位たる所になければならない。若し、此の單位たるべきものに價值ありとすれば、その價值を測るべき他の單位あることを必要とし、斯くては、貨幣が一般的價值の單位なることは失はるゝに至るであらう。従つて、貨幣そのものには價值なしと言はねばならないと。之は、貨幣の價值を何等かに求めんとする努力を廢して、全く異なる解釋を與へんとする立場の現はれてある(註八)。筆者は、ミルの貨幣の價值に關する觀念を明にし、次いで、之が、今日の貨幣理論よりすれば、如何なる位置を占むべきものなるかを、上述する所によつて大體竭くしたと思ふ。されば、貨幣の價值なる問題に就て、更に論議を開陳することは茲には必要無いであらう。唯、一言筆者の思ふ所を添ふれば、貨幣の價值てふ觀念も、要するに、何を捕へて斯く稱するかとの問題に歸するのではなからうか。一が貨幣の竭す所の機能を捕へて、之こそ貨幣の價值なりと言ふ。他は之を目して吾人は、かゝるものに價值なる稱呼を與へずと言ふ。貨幣の價值なる觀念をば、如何に釋くかによつて、或は肯定の立場となり、或は否定の立場となるのではあるまいかと、秘かに想ふ。

金屬説が素材價値を以て、貨幣の價値の源泉とする點は、ミルに於ても、既に叙ぶる所よりして、容易に之を看取し得たであらう。貨幣の價値は永久的には、貴金屬の生産費によつて定るとミルは言ふ。而して、貴金屬の生産は、收穫遞減律に支配せらるゝものであるが故に、その自然價値は、永き時に於ては、最も生産條件の劣れる鑛山より生産するに要する生産費によつて決定せらるゝこととなる。之、先に示したる一般價値法則と全く同一である。金屬説的思想は、茲に至つて殊に瞭然たるものありと言ひ得るであらう。

ミルの立場は金屬説である。従つて、今日金屬説に對して加へらるべき數々の攻難は、ミルも亦之を受けるの責任を分たねばならない。貴金屬の生産費が貨幣の價値を定めるのではない。反對に、貨幣の價値が貴金屬の價値を決定するのである。ミルの如きは正しく其の本末を誤つたものであるとなす名目説の反對はその最たるものであらう(註九)。而して、金屬説が、貨幣理論上に於て、其の地歩を失ふに至る限り、此の倒壊は、等しくミルの貨幣理論をも、相率ゐて其の運命を共にせしむべきものなのである。

(註一) J. S. Mill, Principles, p. 489.

(註二) Ibid., p. 488.

(註三) Ibid., p. 491.

(註四) Ibid., p. 493. P. 495 etc.

That an increase of the quantity of money raises prices, and a diminution lowers them, is the most elementary proposition in the theory of currency, and without it we should have no key to any of the others. (p. 495)

(註五) Ibid., p. 494.

尙、貨幣の流通速度とは、ミルによれば、一定時間内に、貨幣が、その使用者を變ずる回數ではなくて、一定量の取引を生ずるために貨幣が使用者を變更する回數を言ふ。他の語を以てすれば、「貨幣の效程」(Efficiency of money)であると言ふ。

(註六) Ibid., pp. 500—501.

(註七) (イ) 金銀二種を本位とする複本位制度に就いては、ミルは、二者の比率關係が重要問題なることを指摘す。而して、

此の結果は、若し金が銀よりも地金價值を高めれば、

- i. 債務者は銀のみで支拂をなし、
- ii. 金貨は容解せらるゝに至り、

結局、單本位となり終るべきことを叙べて居る。

(ロ) 貨幣の中、不換紙幣に就ては、その流通の基礎を協約 (Convention) にありとなすも、ミルの貨幣本質論が金屬主義なれば、不換紙幣には甚だ同情が無い。

(註八) 貨幣の價值に關する貨幣學者の立場に就ては、本誌前號(第一卷上冊)に掲げられたる K. Kirmaier の文(大野純一氏譯、貨幣の價值と數量説)を參照せられたい。

ミルに於ける價值並に貨幣の觀念

(註九) 山崎覺次郎氏、經濟原論、一六一頁。